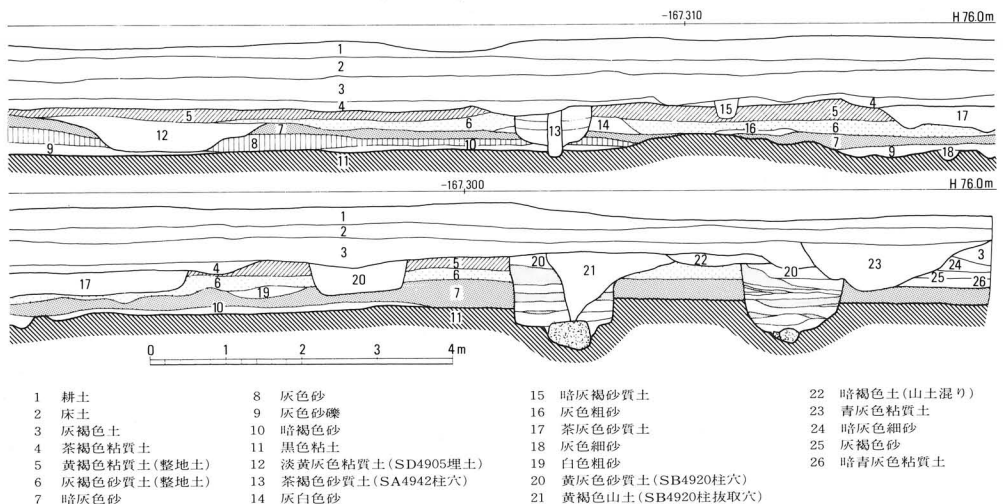


II 遺 跡

1 調査

発掘区の設定 調査対象地は、橿原市上飛驒町73-1・74-1～2・75-1・76-1～3・79-1番地に所在する旧水田である。敷地全体には1 m以上の盛土があったが、これを除去して調査を実施した。発掘区は、敷地北半部の形状にあわせて東西約42m、南北約37mの北区をまず設定し、ついで、坪の中軸線にそって東西約27m、南北約40mの南区を鉤の手状に設けた。その後、建物の規模や配置を確認するために、北区では東、北、西の一部を、南区では東の一部を拡張した。その結果、西南坪の中心部を東西約50m、南北約80mにわたって調査したことになる。

層位 調査地の旧地表は北区で標高約75.7mである。層位は、基本的に上から旧水田耕土（厚さ0.2 m）、床土層（厚さ0.1 m）、灰褐色土層（厚さ0.3 m）、灰褐色ないしは黄褐色の砂層と砂礫層の互層からなる地山の順である。この砂層と砂礫層に遺物は含まれておらず、自然流路と思われるが、その下にはかつて沼状の地形であったことを示す黒色粘土層が基盤を形成している。遺構の大部分はこの地山の上面で検出した。北区中央における地山上面の標高は75.1m前後である。しかし、北・南区とも西寄りの約10mの範囲では地山面がやや低く、7世紀前半の土器を含む溝が数条あり、その上を藤原宮期の土器を含む茶褐色砂質土で整地している。この上面で藤原宮期の遺構を検出し、整地土を除去して藤原宮期以前の溝を検出した。また、北区の南寄りには、砂層の上に古墳時代の布留式土器を少量含む暗褐色粘質土が一部堆積している。なお、藤原宮期の建物の柱掘形と柱抜き穴には多量の黄褐色山土が含まれており、すでに削平されて土層としては残っていないが、藤原宮期の建物の造営にあたって東の日高山丘陵を削り、その土を盛って大規模な整地がおこなわれたことを示している（第7図）。



第7図 北区西壁土層図

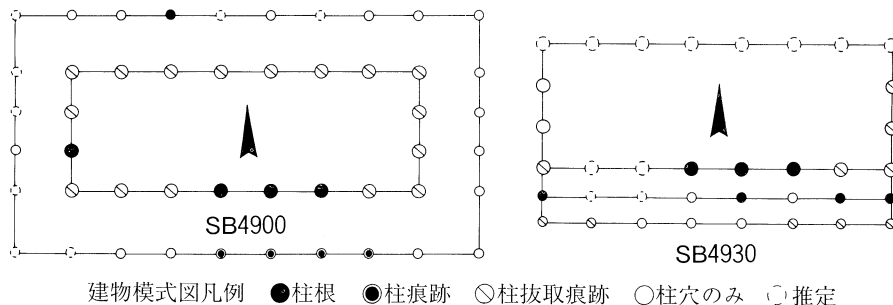
2 遺構 (図版1～17, 第8図)

検出したおもな遺構は、掘立柱建物7棟、掘立柱塀4条、土坑7基、溝8条である。このほかに、東西・南北方向にのびる多数の小溝や、性格不明の小穴がある。このうち小溝は、床土上面から掘りこまれた比較的新しい時期のものから、灰褐色土の下部から掘りこまれたやや古い時期のものがある。いずれも中世以降の耕作に関する遺構と考えられ、今回は図示・記述ともに省略する。検出した遺構は、藤原宮期、藤原宮期以前、藤原宮期以降の3時期に大別されるので、その順序にしたがって記述する。なお、遺構には一連番号を付し、その前に塀SA・建物SB・溝SD・土坑SKなど遺構の種類を示す記号をつけた。

藤原宮期の遺構

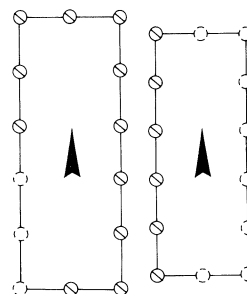
SB4900 北区中央部にある大規模な掘立柱東西棟建物。調査区の関係で建物の北西隅を調査できなかったが、桁行7間、梁行3間の身舎四面に庇がとりつく建物に復原できる。身舎の柱間は桁行2.63m等間、梁行は多少ばらつくが2.1m等間である。庇の出は南側が3.3m、その他は3.0mで、柱位置は身舎の柱筋にほぼそえる。身舎の柱掘形はやや不揃いであるが、一辺1.1～1.7m程度の隅丸方形を呈し、截ち割り調査をおこなった掘形では、いずれもひとかかえ大の石を据えた礎盤を確認している。柱掘形の深さは現状で0.5～1.0m程で、掘形底の高さは最大で約0.3mの差がある。礎盤も基盤をなす黑色粘土層が軟弱なためか、大部分は掘形底より沈下している。柱は、南側柱列東第3～5柱穴と、西側柱列南第2柱穴を除き、すべて抜き取られているが、柱抜き穴は東側柱列南第3柱穴以外はいずれも小さく、掘形の外にはのびない。あるいは、地表付近で柱を切断して抜き取ったものかと推定される。庇の柱掘形は一辺が0.5～0.6m程度でいずれも浅く、北庇東第7柱穴には径12cmの柱根が残る。このほかに、南と北庇の柱穴にほぼ平行した小柱穴群SX4906・4908がある。とくにSX4906は柱筋もそろい、柱痕跡も残るので、庇の作りかえを示すと考えられるが、明確な柱穴の重複関係が認められず、その先後を決しがたい。ここでは南の庇は、当初、その出が2.8m前後であったものが、3.3mに広げられた可能性を指摘しておく。

SB4910 北区の東端にある掘立柱建物。調査区の関係で西側柱5間分を検出したにすぎないが、後述するSB4920とほぼ対称の位置にあることから、桁行5間、梁行2間の南北棟と推定される。柱間は2.56m等間である。柱掘形は一辺1m前後とやや小さく、これ



もひとつかかえ程の石を据えて礎盤としているが、柱はすべて西側へ抜き取られている。柱掘形の深さは現状では0.5～0.8m程であるが、両隅の掘形が深く掘られている。

SB4920 北区西端にある掘立柱南北棟建物。調査区との関係で、西側柱列と北側柱列の掘形はその一部を検出したにとどまる。桁行5間、梁行2間に復原でき柱間は桁行2.88m等間、梁行2.7m等間である。柱掘形は一辺1.2～1.5m程の隅丸方形で、



SB4920 SB4910

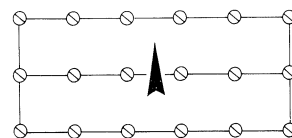
截ち割り調査をおこなった掘形のすべてで、ひとつかかえ大の石を据えた礎盤を検出している。なかでも、東南隅柱穴では、礎盤のまわりに拳大から人頭大の玉石を置いて柱の根固めとし、南妻柱穴と西側柱列北第2柱穴では、礎盤のまわりに拳大の玉石を根石ふうに配した状況を確認している。また、東側柱列南第4柱穴では、山土と基盤の黑色粘土を版築状につき固めた状況が認められるなど、ひととき丁寧な仕事が目についた。柱掘形の深さは、現状では0.9～1.2m前後と深い。柱の抜き取り方向は一定しない。

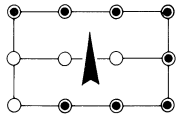
SB4930 北区北端にある掘立柱東西棟建物。道路下にある北側柱列を検出していないが、SB4900と柱筋をそろえた桁行7間、梁行3間の身舎の南に庇がとりつく建物に復原できる。身舎の柱間は桁行2.63m等間、梁行は2.2m等間、南庇の出は2.9mである。このほかに、南側柱列から1.5m南に、柱筋をそろえた小柱穴がある。検出した6カ所の柱穴のうち、4カ所に柱根が遺存しており、他の柱も抜き取った痕跡がないことから推定すると、この小柱は南庇の床東で、南庇は床を張って広縁となっていたと考えられる。身舎の柱掘形は一辺0.8～1.1m、深さ0.5m前後の隅丸方形で、南側柱列東第3～5柱穴を除き柱は抜き取られている。柱根が遺存する柱穴には、いずれも長さ0.5m、幅0.2m、厚さ0.1m程の木製の礎盤が残る。礎盤はいずれも基盤をなす黑色粘土層に沈下している。また、東側柱列南第2柱穴では人頭大の玉石を据えて礎盤としている。庇の柱掘形は一辺0.7m、深さ0.2m程と小さく、柱はすべて抜き取られている。広縁の床東と推定される掘形は径0.4m、深さ0.3mの小さなもので、東第1・2・4・8柱穴に径8～10cmの柱根が残る。

SB4940 SB4900の南にある桁行5間、梁行2間の総柱の東西棟建物。柱間は桁行2.86m等間、梁行3.0m等間である。柱掘形は一辺0.7～1.0m、深さ0.2～0.5mで、柱はすべて抜き取られている。北側柱列東第2柱穴に木製の礎盤が残る。

SA4941 SB4940の東妻柱にとりつく掘立柱東西塀。6間分を検出し、柱間は1.9～2.4mと多少のばらつきがある。柱掘形は一辺0.9m程であるがいずれも浅く、柱は東へ抜き取られている。

SA4942 SB4940の西妻柱にとりつく掘立柱東西塀。8間分を検出し柱間はこれも2.0～2.4mとばらつきがある。柱掘形は一辺1.0m前後であるが、いずれも浅く、柱は抜





き取られている。柱抜き穴から推定すると、柱の径は13～18cm程と考えられる。

SB4950 南区の南半部にある桁行3間、梁行2間の総柱東西棟建物。柱間は桁行2.5～2.9mと不揃いであるが梁行は2.5m等間である。

柱掘形は一辺0.8～1.0mの不整形で、削平を受けたためか深さは現状で0.2～0.4mと浅い。なお、棟通りの西第1～3柱穴の掘形はとくに浅い。その他の柱は抜き取られておらず、径0.2mの柱痕跡が残り、柱の底やまわりには拳大から人頭大の玉石を根固めふうに配している。

SA4951・4952 SB4950南側柱筋にとりつく掘立柱東西塀。調査区の関係で、各1間分を検出したにとどまるが、柱間はともに2.6m前後である。柱掘形は一辺0.8m程で、現状での深さ0.2～0.5mである。なお、この塀の南側には七条大路北側溝の存在が予想されたが、南区南半が著しい削平を受けているためか検出できなかった。

SK4970 SB4930の西側にある小規模な土坑。東西0.7m以上、南北0.6m、深さ0.1mで、底に平面楕円形を呈する曲物(0.6×0.35m)の側板がわずかに遺存していた。

藤原宮期以前の遺構

先述したように、北・南区とも西側には7世紀前半の溝が存在し、これらが埋没した後に、藤原宮期の建物の造営にともなう整地土によって上面が覆われ、その上にSB4920とSA4942が建てられている。北区の西南隅の一部と、南区の西半でこの整地土を除去して下層の遺構を検出した。

SD4955 南から北西へやや湾曲しながら流れる斜行溝。北区で分岐して一部は西へ流れ、SD4905となる。幅約2m、深さ0.3mで約35m分を検出したが、南半では拳大から人頭大の玉石で護岸し、底にも敷きつめていた状況が一部残る。溝内から飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階の土器が出土。

SD4956 SD4955の西約3mを平行して流れる斜行溝。幅1.8m、深さ0.2mで20m分を検出した。溝内に飛鳥Ⅰ段階の遺物を含む。

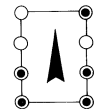
SD4957 SD4956を壊して、ほぼ東西方向に流れる斜行溝。斜行溝SD4955より古い。幅0.3～1.0m、深さ0.1mで一部に拳大の玉石を敷く。溝内から飛鳥Ⅰ段階の土器が出土。

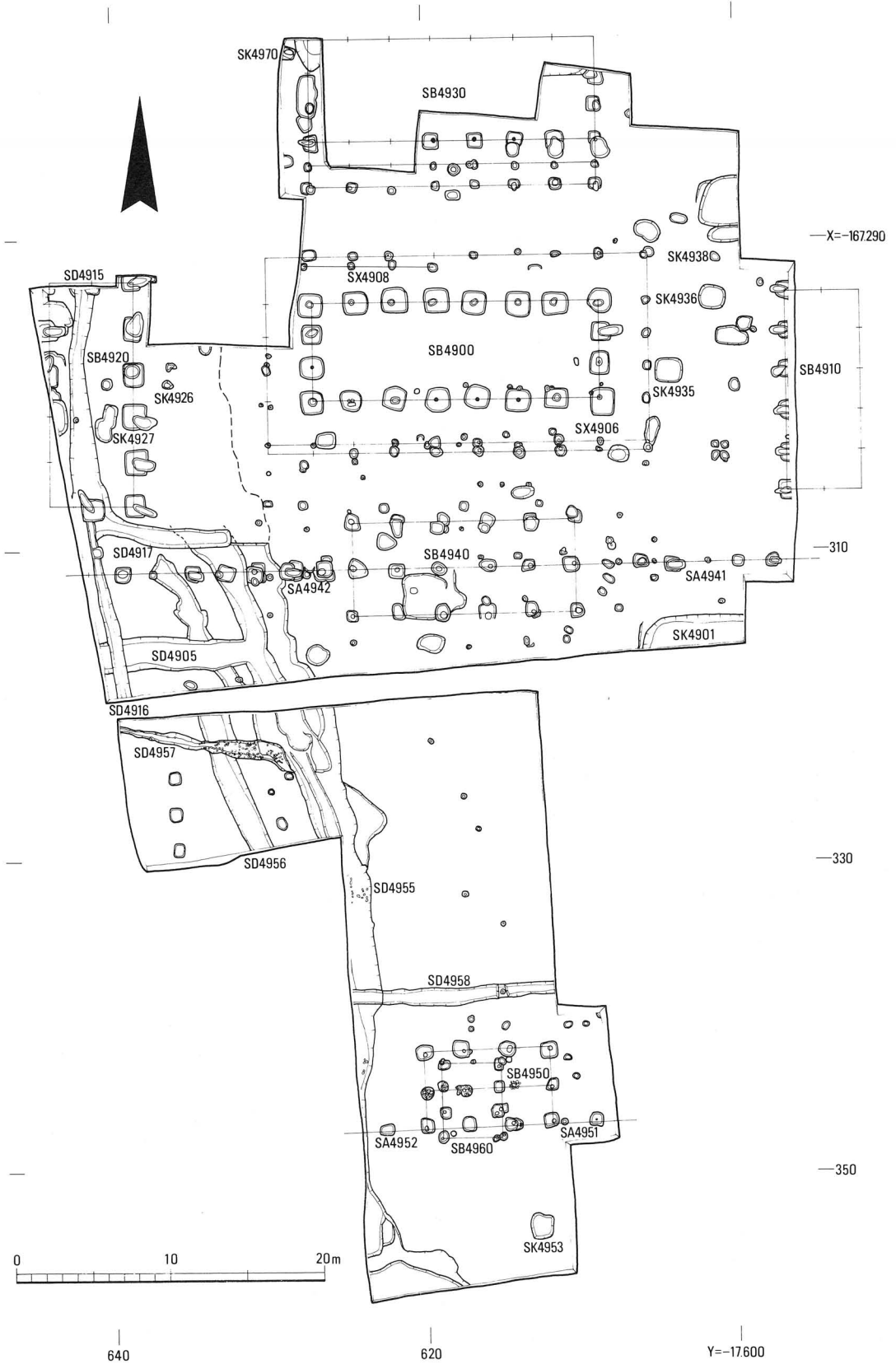
SK4901 北区東南隅にある土坑。その一部を検出したのみであるが、東西6m、南北2m以上の規模があり、深さは0.6mである。埋土から飛鳥Ⅲ～Ⅳ段階の土器が出土。

藤原宮期以降の遺構

SB4960 南区の南寄りにある桁行3間、梁行1間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は、桁行1.5～1.7m、梁行3.5mであるが柱筋はそろわない。柱掘形は径0.6m前後で浅く径0.2m程の柱痕跡が残る。SB4950の柱穴との切りあいはない。

SD4958 SB4960の北3mの位置にある素掘りの東西溝。幅0.8～1.0m、深さ0.1mで埋土から10世紀前半の土器が出土している。





第 8 図 検出遺構実測図 1/400

SD4915・4916 北区西端にある素掘りの南北溝。幅0.9～1.8m、深さ0.5m。南のSD4916と一連の溝で、26m分を検出した。SB4920の柱抜取穴より新しく、SD4917よりは古い。溝内には流水を示す砂層が堆積している。10世紀末から11世紀初頭の黒色土器と土師器が出土。

SD4917 SD4915に重複する素掘りの斜行溝。幅1.0～1.5m、深さ0.3m前後で人頭大から拳大の玉石を多量に含み、激しい流水があったことを示している。溝内から11世紀初頭の土師器が出土しているが、重複関係からSD4915より新しい。

SK4935 北区東寄りにある東西1.7m、南北1.5m、深さ0.4mの隅丸方形を呈する土坑。埋土から牛の骨や歯とともに、鼻木2個体分が出土。骨の出土状態からみると、埋葬されたものとは考えられない。14世紀後半の土器や陶器の小片が出土している。

SK4936 SK4935の東北にある同規模の土坑。やはり牛の骨と歯とともに鼻木1個体分が出土。これも出土状態は埋葬を示すものではない。14世紀後半の土師器羽釜が出土。

SK4938 SK4936の北にある小さな土坑（0.6×0.5m、深さ0.2m）。12世紀後半の瓦器椀2個が重なった状態で出土し、同時期の土師器羽釜と小皿がともなう。

SK4953 南区東南隅にある東西1.4m、南北1.6m、深さ0.65mの隅丸方形の土坑。埋土上層から12世紀中頃の瓦器椀が出土している。

SK4926 SB4920の東にある不整形の小さな土坑。埋土から鈍片が出土している。

時期	遺構番号	種類	規模／庇	桁行 m	梁行 m	庇 m	備考
B1期	SB4900	東西棟	7×3 四面	18.4	6.3	南 3.3 他 3.0	総柱 SB4940の東にとりつく SB4940の西にとりつく 総柱 SB4950の東にとりつく SB4950の西にとりつく
	SB4910	南北棟	5×(2)	12.8			
	SB4920	南北棟	5×2	14.4	5.4		
	SB4930	東西棟	7×3 南	18.4	6.6	2.9	
	SB4940	東西棟	5×2	14.3	6.0		
	SA4941	東西堀	6以上	13.0以上			
	SA4942	東西堀	8以上	17.1以上			
	SB4950	東西棟	3×2	8.2	5.0		
	SA4951	東西堀	1以上	2.6以上			
SA4952	東西堀	1以上	2.6以上				
不明	SB4960	南北棟	3×1	4.8	3.5		

第2表 建物・堀規模一覧